

2022 年度
京都精華大学大学院
デザイン研究科 修士課程(実技系)

入学試験問題

小論文（日本語解答）

*試験時間 10:30 ~ 12:00

*試験開始後 30 分以内は退出できません。

*辞書および電子辞書の持ち込みは不可。

*問題用紙は試験終了後に回収します。

*解答は解答用紙に記入すること

座席番号	
------	--

問 題

以下の文章を読み、その概要を簡潔に述べなさい。また、ここでテーマに据えているデザインの問題とは何か、あなたの考えを論述してください。(字数制限なし)

レヴィ＝ストロースは、南米のマト・グロッソの先住民達を研究し、彼らがジャングルの中を歩いていて何かを見つけると、その時点では何の役に立つかわからないけれども、「これはいつか何かの役に立つかも知れない」と考えてひょいと袋に入れて残しておく、という習慣があることを『悲しき熱帯』という本の中で紹介しています。そして、実際に拾った「よくわからないもの」が、後でコミュニティの危機を救うことになったりすることがあるため、この「後で役に立つかも知れない」という予測の能力がコミュニティの存続に非常に重要な影響を与える、と説明しています。

この不思議な能力、つまりあり合わせのよくわからないものを非予定調和的に収集しておいて、いざという時に役立てる能力のことを、人類学者であり、また構造主義哲学の始祖とみなされているクロード・レヴィ＝ストロースはブリコラージュと名付けて近代的で予定調和的な道具の組成と対比して考えています。レヴィ＝ストロースは、サルトルに代表される近代的で予定調和的な思想（つまり用途市場を明確化してから開発する、といった思考の流派）よりも、それに対比されるより骨太でしなやかな思想をそこに読み取ったわけですが、実は近代思想の産物と典型的に考えられているイノベーションにおいても、ブリコラージュの考え方が有効であることが読み取れるのです。

こういった「何の役に立つのかよくわからないけど、作ってみたら後で莫大な価値を生み出すことになった」という発明は、先述した蓄音機や航空機の他にも枚挙に暇がありません。例えばアメリカにおけるアポロ計画もそれに該当する事例として挙げ

られるでしょう。アポロ計画は、一言で言えば「月に行こう！」という、単にそれだけの計画であって、少し引いて考えてみると一体それが何の役に立つのかサッパリわからないプロジェクトだったと言うことも可能ですが、私が知る限り現代の社会に巨大な貢献をもたらしていると確信できる点が少なくとも一点あります。それは医学の領域です。

集中治療室=ICU (Intensive Care Unit) は、アポロ計画がなければ実現できなかったか、あるいは少なくとも実現が大幅に遅れたであろうと考えられています。ICUというのは、患者の身体に、生命に影響を及ぼすような変化が起こったらすぐにそれを遠隔で医師や看護師に知らせるというシステムですが、このシステムは、宇宙飛行士の生命や身体の状態を、やはり遠隔地からモニターして、何か重大な変化が起これば即座に対応するという、アポロ計画のような長期の宇宙飛行における必要性から生じた技術です。確かに映画『アポロ13』を観ていると、身体の内部と外部の環境をモニターして、大きな変化があると即座に手を打つという、ICUに求められるシステムが、そのまま実現されていることがわかりますよね。

アポロ計画のような、壮大な無駄遣いに見えるような取り組みからでも、人類にとって必要欠くべからざるような技術やシステムが生み出されているということを多くの人は知りません。しかし、これは典型的なブリコラージュだと言えます。このプロジェクトを主導したケネディの脳内に、この宇宙計画によって派生的に人類にとってものすごく有用な智慧が生み出されるはずだという確信があったかどうかはよくわかりません。しかし、この計画を完遂することによって何か重大な智慧が、それを完遂するものにもたらされるはずだという「曖昧な予感」がもし、関係者の中にあっただとすれば、まさにそれはマト・グロツの先住民たちがもっていた野性的な知性だったのだと思わざるをえないのです。

翻って、現在のグローバル企業においては、「それは何の役に立つの？」という経営陣の問いかけに答えられないアイデアは、資金供給を得られないことが多い。しかし、先述したこれらの事例によれば、世界を変えるような巨大なイノベーションの多くは「何となく、これはすごい気がする」という直感に導かれて実現しているのだということ、我々は決して忘れてはなりません。

出典 『武器になる哲学』 山口周